

理学療法 50 年のあゆみと展望—新たなる可能性への挑戦—わが国の理学療法の歴史と継承

1 九州からの発信

九州栄養福祉大学 リハビリテーション学部 橋元 隆

1969年に発行された「理学療法と作業療法ジャーナル Vol.3 No.5. 医学書院」に、当時 WHO 日本政府顧問で国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院理学療法学部長のバーバラ・ナッシュ先生が第4回日本理学療法士学会（昭和44年、神戸市）での特別講演の内容が掲載されています。その時のテーマが「どこへ行く日本のリハビリテーション」です。先生はわが国における「リハビリテーション」という言葉の使われ方について、リハビリテーションとは言っても、事実は理学療法のみを指していたり、理学療法士と作業療法士しか養成していないのにリハビリテーション学院と名乗ったり、その曖昧で便宜的な使われ方を懸念されています。また理学療法士という専門職と、従来から技術員との違いに触れ、理学療法士が専門職として認められるよう自らの学問と技術の向上を図り、チームのメンバーとなるための努力を重ねなければならないことを強調しています。それもまずは国内で認められなければならないにもならない。日本で認められるようにどのような犠牲も惜

しんではない。そうでないいつまでもチームのメンバーにはなれない、一介の技術員に終わってしまう。専門職として認めてもらうこの戦いに勝ち抜かなければあなた自身だけでなく患者さん、日本の損失となってしまいます。あなた方は、日本のリハビリテーションの将来のため、どのような決意をおもちでしょうか、と結んでいます。理学療法士免許有資格者は10万人をはるかに超え、学術領域の進歩には目を見張るものがあります。果たして彼女の言った課題に対して、私たちは応えることができたのでしょうか。九州から50年を回顧し、九州の文化と理学療法・地域性・身分法をkey wordに、次のことについて言及したいと思います。

1. なぜ九州にリハビリテーションの陽が昇ったのか
2. マッサージから運動療法へ
3. 洋式と和式のリハビリテーション
4. 量と質
5. これからの展望

理学療法 50 年のあゆみと展望—新たなる可能性への挑戦—わが国の理学療法の歴史と継承

2 理学療法 50 年の歩みと展望 新たなる可能性への挑戦 我が国の理学療法の歴史と継承

茨城県立医療大学名誉教授 伊東 元

日本の理学療法が公に歩み始めて50年が経とうとしています。本学会も大きな変化を迎えます。そこで自らの体験した研究活動を中心に3つの領域（研究・臨床・教育）を通して今回のテーマについて私見を述べ、そして各シンポジストとの話を紡いで新たな可能性を探ってみたいと思います。

時間的流れとして1972年に東京都へ理学療法士の研究職として就職しました。同時に隣接する病院で臨床を理学療法士として兼務しました。1995年からは大学の教育職としてその翌年からは大学付属の病院を兼務し活動してきました。主な生業としての活動に加えて日本理学療法士協会での活動として理事そして協会機関紙および学術誌としての編集委員などの活動に参画してきました。また地域活動として20数年間リハビリテーション相談や訪問活動などを行ってきました。これらの体験は理学療法の現状や将来を考えるうえでこれまでの歩みを基にしながらそれぞれの体験

が相互に関連しあってきました。そして理学療法の目的・対象・方法、障害・障害者、運動・動作・行為、個体・個人、成長・発達・老化、学び・学習・教育、家族・地域、等々について考えてきました。

まずは研究・臨床・教育領域の組み合わせのなかでの共通する項目を挙げて理学療法の新たな可能性を提案してみます。研究・臨床に関してはEBPTの基盤にあるようにevidenceをどのように探して利用するかだけではなく如何にevidenceを作り出すかにも力を入れてゆくこと。臨床・教育に関しては指導者と障害者・患者・学生、教師と学生における指導や教えについて自ら学ぶことの必要性を見直すこと。教育・研究に関しては科学的に作りだされた結果についての知識を伝えるだけではなく、特に結果を作り出してきた考え方の枠組みを伝え検討すること。